



TITLE:

プラネタリウム通信(第2號)

AUTHOR(S):

CITATION:

プラネタリウム通信(第2號). 天界 1940, 20(234): 378-379

ISSUE DATE:

1940-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168080>

RIGHT:

プラネタリウム通信

(第2號) 昭和15年8月8日

★ 大阪市プラネタリウム

(東亞天文協會報導部)

○依然活況を呈して來た。昨一年間の入場者は約20萬人である。又、本年7月中の入場者は約28000人と云ふ盛況であつた。去5月には「遊星めぐり」を演出し、19、20日兩日午後、望遠鏡で白晝金星の觀望會を行つた。6月は「星と時」である。同月27日より三日間に涉つて、アルゼンチン訪日軍艦アルヘンチナ號の乗組勇士を迎へた。大阪市を訪問する海外の軍事、貿易、經濟、教育などの訪日團は殆んど皆當天象館に入場して、暫し、東洋の星空の神秘に浸るのが常である。又、7月26日には日米學生會議團約80名が來觀した。

○7月、8月を通じて、電氣科學館「知性と教養の夕」を開館し、毎週土、日曜に夕7時より、天文や電氣の講演會、映畫の夕などの外、觀望會なども催した。7月28日には最初のプラネタリウム劇を試みた。これはプラネタリウムの星空の下で、星の對話劇と「太郎星物語」の舞踊劇とであつて、この夕夏期中の超満員を示した。これは今後のプラネタリウムの演出方法の一改良法となるであらう。又同じ目的のために更に8月10日の夕は、「星空と音樂」の融合した洋樂の夕を日本ビクターと提携して開催する。尙、夏期中の天文に関する講演は次の如くであつた。

入江來布氏：俳句に現はれた天文、山本博士：南米日食と世界の學會、菊池教授：宇宙線の話、村上教授：宇宙の歴史、宮森作造氏：七夕の星空、星で方角を知る法、石傳教授：短歌と天文。

○平常の演出話題は

7月：「天の川の神秘」、8月：北極の空、9月：月世界の探險。

海外のプラネタリウム

★ エナ市

○昨年より本年冬期にかけて「遊星運動の假像と實在」の演出と「野外に於ける天文學的方位の決定」の講習を行つた。又「汝と星空」と題して前後6回、6時間に亘る演出が、エナ在住の天文學者と數學者の協力でエナ市獨逸補習學校と提携して開かれ、たこれは「エナ新聞」が一大成功!と報じたもので、

第1回……H・ウエルナ博士：星座繪及び星座に就いて(1939年10月6日)この日、天上の解説が終るや、ペエト・ヴエン作「英雄」が響き渡り、觀衆を再び地上へ導いたと報じてゐる。

第2回……H・ラウデンプツシュ博士：季節の移り變りに伴ふ吾故郷の星空
第3回……同氏：野外で星に依つて方角を知る法

第4回……同氏：天文學使命としての「時」の計算

第5回……カール・ハインツワイゼ博士：蒼空の下を極から極へ

第6回……H・ウエルナール博士：昔と今の天體運行の諧音

○ニュース映畫に現はる

ツアイス工場の天才で生みの親である故エルンスト・アベ博士の100年祭を祝し、獨逸宣傳省ニュース映畫本部では、ツアイス製品と光學工場の能力を發揮したプラネタリウム器械の本體を運轉しつつ映畫に収めた。

★ミラノの新演出プログラム

太陽と月、宇宙内の地球、星辰燦々たる空、眞夜中の太陽、星々の中の一つの星、遊星、暗黒・彗星・流星、目に見えざる天文學、星雲と星の發達、ミラノから南極まで、世紀の天文學、季節のリズム。
(高城)

今1940年十月1日の日食について

研究上から、又、國策上から、今年の十月初めの皆既日食を觀測のため、南米ブラジルに遠征する案が、一昨年来、本會で計畫せられ、山本會長を始めとして、約10人の會員が、最近まで熱心に準備をすゝめ、既に彼地の官民の了解を得て、六月から八月まで、三回にわたつて、3隊の人々が出發する豫定であつたのに、最近に至り、外には歐洲戰亂に關聯して、急に國際狀勢の變轉あり、内には凡ゆる新體制や新組織の實踐となり、めまぐるしい形勢變化により、遂に此の遠征も中止の止むなきに至つたのは、遺憾に堪へない。山本博士以下の一行の人々の衷心も同情の至りである。(九月27日記す)

傳へられる所によれば、上記の如き世界の形勢のため、やはり歐洲各國でも、南阿や南米へ向ふ筈であつた觀測隊の派遣は悉く中止され、只、英國からは、若干の器械のみが南阿へ向け發送された。此等の器械を用ひて、ケープやユニオンの兩天文臺員たちが Calvinia 町(ケープタウン市の東北東、約300キロ)で、何等かの觀測を行ふ豫定とあるが、しかし、近頃の外國電報によると、南阿でもブリア人の間に急に反英運動が起つて來た由であるから、カルギニヤあたりで觀測隊のために、何かのトラブルが起らなければ好いがと案ぜられる。

一方、南米ブラジルの方へは、やはり米國から二三の觀測隊が出かけるらしく、殊に、ブラウン大學の Charles H. Smiley 教授や、マウント・ホリヨク女子大學のミス Farnsworth 教授、それにプロギデンス市に最近組織された“Skyscraper”團員等の一行は、既に去る八月15日ニウヨークを出帆し、ブラジルに向つたといふ。此の一行の行先きは、ペルナンブーコ市の西北、約100マイルの所にある Quixeramobim 村で、其の地では、地方時の10時頃に、殆んど5分時間にわたる皆既日食が見られる筈である。其の他の觀測隊の消息は